

【学園研B】

研究課題名：教育理念の変容が教師の意識・教授活動および学習者の行動に与える影響の研究—ベトナムにおける英語教育改革を例にとって

文化情報学部 教授 木村 隆

ベトナムでは、2003年に教育改革のアクションプランが策定され、教師中心のカリキュラムから学習者中心のそれへと変貌を遂げた。このような教育理念の変容は、教師の意識や教授活動に影響を与え、さらに教師の意識や教授活動の変容は、最終的には学習者の学習行動に変容をもたらすものと考えられる。そこで本研究では、①ベトナムにおける新しい教育理念が教師の意識や教授活動にどのような影響を与えているか、②教師の意識や教授活動が小中学生の意識や学習行動、特にメタ認知を含む英語学習ストラテジーの使用にどのような影響を与えているか、の2点について、現地での授業観察や質問紙調査等を通して明らかにしようとした。

今回の調査では、学習者用と教師用の2種類の質問紙を作成してベトナム語に翻訳し、学習者用質問紙についてはハノイ市内の公立小学校2校の5年生（最高学年）各30名（計60名）に対して、また教師用質問紙については上記2校で英語授業を担当する教師各1名（計2名）に対して実施した。学習者用の質問紙は4段階評定尺度法の質問紙とし、英語学習に対する動機づけの傾向に関する5項目と学習ストラテジーの使用認識に関する13項目を含めた。一方、教師用の質問紙は、教師の年齢や学歴、授業の目的や狙い、その達成度や問題点についての考え等を尋ねる自由記述式の質問紙である。さらに、2校のうちの一つでは、調査対象となった学習者の英語授業を参観しビデオテープに記録した。

学習者に対する質問紙調査の結果、動機づけ項目に対する評定平均値は5項目のうちの4項目で3.5を超え、調査対象となったベトナムの小学5年生の英語学習意欲は極めて高いことが示された。また、学習ストラテジーの使用認識に関しても、13項目のうちの7項目で評定平均値が3.5を超え、ベトナムの小学生は各種の学習ストラテジーを積極的に使用していることが示唆された。学習ストラテジー項目のうちで最も評定平均値が低かったのは「うまく言い表せなかった時は、身ぶり手ぶりを使って伝えようとする」という項目だったが、この結果には大げさな所作を好まないベトナム人の控えめな国民性が反映している可能性が考えられる。

参観した授業は歌やゲームを取り入れたコミュニカティブなものであり、イギリスで出版された教科書が使用されていた。担当教師の英語は流暢で、授業のほとんどを英語だけで行っていた。授業の様子からは、アンケート結果を裏付けるように、多くの児童が高い動機づけを持ち、積極的に学習ストラテジーを使用していることが窺われた。また、授業を行った教師を含む2名の教師への質問紙からは、30歳代の彼女らがいずれもハノイ国家大学外国語学部を卒業した英語教育の専門家であり、自信を持って授業を行っていることが示された。

これらの調査結果からは、教育理念の変容は確かに若い教師の意識や教授活動に好ましい影響を与え、それが学習者の動機づけや学習行動にも良い影響を及ぼしていると考えられる。しかしながら、本調査は首都ハノイの比較的整備された小学校で行ったものであるため、結果の解釈には慎重であらねばならない。特にベトナムのように「格差」の大きな社会では、地域間・学校間での「教育内容の格差」もまた大きいからである。